

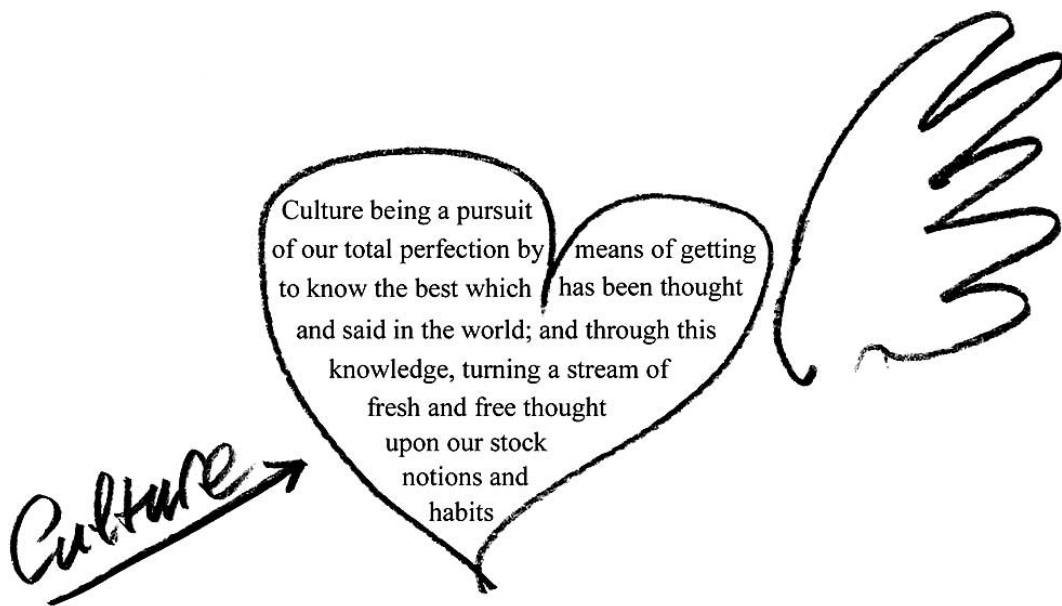
“TASTE IS, NEVER BEING SATISFIED” – DEFINITION BY ANDREAS

「テイスト（自分の趣、センス）とは、決して完璧にはなりません」 — アン
ドレアスによる定義

ファッションデザイナーになりたい人達へのアドバイスです。私はたくさん手紙を頂きますので、ここに、一つお返事を書きたいと思います。

テイストが全てです。識別から広がり、物と物の違いを知ること。何が良くて何が素晴らしいのか。私たちは誰もがそれに対してそれぞれ違った度合いを持って産まれます。それを学ぶことはできません。しかしそれを磨いていくことはできます。

そして皆さんがそれを磨いて行く方法が本物の文化を通して行なわれます。



また、器用でなくてもなりません。「デザイン」がどのように作られることになるのか何の手がかりも無く絵を送って来る人達もいます。それでは良くないのです。そういう人達はただ夢を見ているだけなのです。

皆さんは何に深く関心がありますか？他に何かしてみたいことはありますか？そしたらまずそれをしなさい。そうしたらもっと学べるから。何か他のことをすることによって、それでもファッションに本当に携わりたいと思うならば、少なくとも何かしらのアイディアを持ってファッションに戻ってくるべきです。生物学を学んでも良いし、アートの歴史を学ぶことだってできるのです。こういった全ての科目が皆さん方を文化や美へと導いてくれます。数学だってそうです。しかし何を勉強するにあたって、アートや文学に自分を没頭させることを忘れてはいけません。読書は必要不可欠。ファッションをしたいなら、ファッションの歴史を知らなければ。現在を知るためには

過去を知る必要があるのです。私たちの目的は、今、私たちが生きている世界を知ることです。

ファッションの学校ではアイデアなんて教えてくれません。そこではパターンカッティングを教えてくれます。（これを教えない学校もあるようです。このような学校には絶対行かないように。）独学で縫製の仕方を身に付けることはできますし、他の学生から学ぶことだってできます。ファッションの学校に行くことで何が一番良いかと言うと、学ぶ時間を与えてくれることだと言われています。

複製。複製して自分で学んでみなさい。私はそれが唯一学べる方法だと思っています。それをしてみると、それがどんなに大変なことか分かるでしょう。イヴ・サン・ローランをその通りに複製してみて！何か一つでも変えるなら、そこに関わるもの全てを変えないといけなくなるでしょう。私はたまにクチュールの服を、「プレタポルテ（既製服）」の手法で作れるよう、また、現在の日常生活に合うような方法で複製をしてきました。例としては1987年のデザイン「スタチュー・オヴ・リバティー」です。18世紀に着用されていたコルセットの形を複製しましたが、横にはゴムやジップを使用しました。黄金律は、自分の方法で、しかもオリジナルと同様に良くなければならないということです。デザインは100通りもの決断をしながら形作られます。

デザインは、存在するのに正当な理由がなければならない。世界はそれを必要としますか？